



TITLE:

<矢野仁一博士追悼録>追悼記事

AUTHOR(S):

井村, 重帯; 桑原, 武夫; 佐伯, 富; 外山, 軍治; 内藤, 雋
輔; 藤枝, 晃; 宮崎, 市定; 矢野, 正和; 吉川, 幸次郎

CITATION:

井村, 重帯 ...[et al]. <矢野仁一博士追悼録>追悼記事. 東洋史研究 1970,
28(4): 10-44

ISSUE DATE:

1970-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/152802>

RIGHT:

矢野先生の思い出

井 村 重 帶

私が故矢野仁一先生の知遇を得たのは、わづかに最近の五年に過ぎない。去る三十九年、私は縁あってカルピス食品工業會社々長三島海雲氏創設の三島海雲記念財團の業務を擔當することになったが、その最初の仕事が矢野先生の「中國人民革命史論」編集の仕事であったのである。

この出版のいきさつの詳細は省略するが、故博士と同社長とは、共に北京在任時代以來六十餘年に互る親友であつて、同書はいわば三島社長の矢野先生に對する友情出版とも言ふべきものである。

明けて四十年春、先生にそれについての挨拶状を送つたが、すぐにご返事をいただいた。獨得の書體で書かれた便箋に關西向陵會と印刷されてあつたので、舊制一高のご卒業ではないかと考えて、同窓會名簿を見ると、なんと私の生れた前年に一高を卒業しておられるではないか。當時の舊制高校生活は、單に學問の授業を受けるだけでなく、強制寄宿制度による共同生活訓練の場でもあり、學生の寄宿舍自治運営による社會生活體驗の場でもあり、現今のようなクラブ活動も盛んに行われ、要するに人間形成を目標とした教育制度であつた。そうした生活を経た卒業生たちは、同輩はもちろん、先輩後輩の關係の結びつきも強く、極端に言えば卒業後も單に同じ高校の出身者というだけで、たがいに年齢を超えて親近感を持つ経験をいくたびか経験はしている。

ほどなく私が著書に關する用件で倉敷に先生を訪問する機會に恵まれたのが、同年初夏の候であつたと記憶する。先生は、私から見れば二十年を超える大先輩であり、しかも東洋史學界の權威者であり、その東洋史は私の舊制中學時代にお

ける最も苦手な學科であつたし、どういふ會見内容になるかと恐る恐る先生に初對面したわけだが、豫想に反して溫顔をもつて迎えてくださったので、實はほつとしたのであつた。先生の坐右にはうず高い資料や原稿が積まれてあつて、九十歳を超え、視力聴力共に衰えておられながら、なお中國史研究一筋にうち込んでおられるお姿を拜見して、私は先づ頭が下つたのである。

前述の著作は、先生が一生を堵けて續けて來られた研究の總締めくくりの意味で執筆したものだというお話の後、私に示された先生自作の

天よわがいのち奪うな世のために

我のなおなすことあるを思いて

という一首の歌が今だに忘れられない。

ひとり中國關係のお話ばかりでなく、現に全世界の注目を浴びている南北ベトナムの問題、南北朝鮮對立の問題にも觸れられ、同一民族による同一民族のための人民革命でなければ決して成功しないし、これに對する他民族や他國家の干涉介入など決して成功しないなどと、聲を勵まして強調されたお話などが、今だに耳底に残っている。

やがて前述の大先輩であられるという話から、話の糸口が急速にほぐれて行つたが、ふとお室に横額の畫の飾られあるのが目に留つたので、お尋ねしたところ、なんとそれが私の中學時代の同級生井内清雄君の餘戲の筆になつたものであり、同君は既に故人となつておるが、その夫人が實に先生の長女であることがわかつたのである。圖らずも、ここにも先生との淺からぬ因縁が結ばれていたわけである。

その後、出版の進むにつれて、先生との文書の往復も頻繁となり、倉敷訪問の回数も數回に及んだので、先生のご愛顧をよいことにして、不遜にも、先生の文章は一節の内に主語が幾つもある讀みづらいとか、*てにをは*の使い方がまちがっているなどと、ずいぶん無遠慮な反論を敢てしたこともたびたびであつたが、先生はついぞその溫顔をくずされた

ことがなかった。私自身、あと二、三年で父を失った年齢に達する老骨でありながら、矢野先生という新たな慈父を與えられたような氣持で、甘えたり無理を申しあげたりするような間柄になってしまっていたのである。

昨年末、ちょうど仕事納めの日であった。事務機の整頓をしているところへ、先生から一冊の雑誌が届けられた。さっそく開いてみると「共產圈問題」の八月號であつて、巻頭に先生の「理由（わけ）のわからぬ中共の文化革命——私の六つの疑問」という論文が掲載されてあつた。その一冊を携えて、大晦日、私は紀州白濱温泉への旅に出たのである。正月三日、潮岬まで往復のドライブを終えて宿舎に戻った私が夕食を終えた頃、東京の留守宅からの電話で先生の急逝を知らされ、三島社長代理として葬儀に參列せよとの指令を受けた私は、あまりの突然のことでもあり、悲しみというより、むしろ途方にくれたのであつた。

ご葬儀の當日、大阪から倉敷に向う車中の私は、改めて前記の論文——恐らくは絶筆——をむさぼり讀んだ。先生がご健在でさえあつたら、陽春の頃にお訪ねして、例によつて、反問したり説明していただきたいと思つたであらう點がいくつかあることを發見した、その念願は遂に永久に絶たれてしまつたのである。深い悲しみが初めて私を襲つた。今となつては何を申し上げても、ご返事が歸つて來ないことは分つていたが、せめて先生のご遺骸に向つて「先生、なぜこんなに突如亡くなられたのですか。どうして私の挑む論戰に應じていただくまで待つていくくださらなかつたのですか」など、弔辭にならぬ弔辭を申しあげたいなどと考へていた。葬儀に參列したとき、途中いくたびか私にも一言お別れの言葉を述べさせていだきたいと申し出ようかと思つたが、先生とのご縁の短いのに厚かましいと考へて、じつとそれをこらへた。出棺に先だつ最後のお別れの際、安らかに眠つておられるようなお顔に一輪の花を捧げた時、「先生。ほんとうにお世話になりました」と口に出したつもりだが、果して言葉になつていなかったのではなかつたらうか。私があつかましくも本誌にこの拙稿の掲載をお願いしたのも、私としては亡き矢野先生のご冥福を祈る弔辭のつもりからである。それを快諾してくださつた京大東洋史研究會のご好意に對し深く謝意を表して筆を擱くこととする。（終）

追 想

桑 原 武 夫

倉敷で、お別れの焼香をしながら、私は心の中でつぶやいた。

——先生、どうかお許し下さい。あのときは本當にお約束どおり伺うつもりだったのです。それが、先生を最後に欺いたようなことになって。すみませんでした。お詫びいたします。

あのときというのは、昭和四十三年十一月、家内を伴って倉敷に先生をお訪ねしたときのことである。それは特別に用事などあったわけではなく、『支那革命史論』の出版記念以來御無沙汰していたので、御機嫌をうかがいたいと思ったのであった。先生はいつも通り、待ちかねたといったかたちで請じ入れられ、久闊を叙するひまもなく、劉少奇はすぐれたマルクス・レーニン主義者であって、彼を非難攻撃することは許されない、という議論を展開された。私は中國革命史については一向に知識がない上に、文化大革命になってからはいよいよわからぬことが多いので、先生のお説を敬聽するのみであった。

あらかじめ訪問はお知らせし、すぐ失禮すると明記しておいたのであったが、そして、ひる近くになったのでお別れを告げたのだが、それはもとより許さるべくもなかった。先生は京都におられるころから、人なつこくて一たんお会いすると別れをきらわれる風があったが、倉敷へ移られてから、とくに晩年はそれが著しかった。小島祐馬先生に高知で最後にお會いしたとき、先生も、矢野先生をお訪ねしたいのだが、お目にかかるときはよいが、お別れするときに名残り惜しうに、悲しそうな顔をされる、それを見るのがつらくて近ごろお訪ねしていない、ともらされたことを思い出す。

晩年の先生に至上の孝養をつくされた正幸氏夫人のお心づくしのスープとサンドウィッチをいただいたが、料理について一切の發言をされないのは在洛時代から少しもかわらなく、私たちと同量の晝食をすっかり召しあがったのには感心し、これならまだまだ御長命と感じたのであった。その夕は尾道まで行く豫定にしてあったので、それに三時間ちかくも大きな聲で發言しつづけられた、その御疲勞も心配なので、今度は少しきっぱり辭去のお許しをもとめたところ、

「そうかね、もう早や歸るのかね」とおっしゃるので、

「また必ず参ります。來年中には必ず參上するお約束をします」と申上げると、

「本當かね、武夫さん、ウソはいっちゃいかんよ、そんなこといつて來ないんじゃないかな」といわれる様子はどこか童めいてさえ見えた。私は大きな聲で先生の耳もとに叫んだ。

「きつと來年中にきます。ウソなんかいいません、先生」

ところが昨年は娘の結婚話がおこり、擧式となつたのは十一月であつた。年末年頭は無理なので、春になったら、と思つてゐた。御永眠の御知らせをいただいたとき、私の最初の反應は「しまった！」であつた。私は先生にたいしてウソツキになつてしまつたのだ。

先生は共產中國を愛され、ソ連に偏見をもたれることはなかつたが、一面、きわめて古風なところをもつておられた。私の父の話では、お若いころの先生がお姉上さまと會われるときは、次の間の、しきいのこちら側から、「お姉上さま、お久振りでございます」といつて平伏されたという。そうした先生が、自分が京大へ來て、一生好きな勉強ができるようになったのは、全く武夫さんのお父さんのお蔭である、という信念（恐らく心情的にいささかの誇張をふくむ信念）を堅持しておられ、晩年には人前で、それを公言されることがあつて、私が赤面したことも一再ではない。先生は私を友人のせがれとして寵愛して下さつたのだが、そこには恩人の子供への殊遇という感じが少しまじつていたように感じられた。そうでなければ、あんなに可愛がつて頂けたのはおかしい。

私がいつから矢野先生を意識したか記憶がない。ただ、正一氏のお母さんの御病氣、御逝去のところから矢野さんという言葉がはつきり私の頭の中に定着した。アメリカから繪葉書を頂いたことはひどく嬉しかった。考えてみれば、私個人宛の外國郵便を受取ったのは、私の一生でそれが最初であった。そのときまた先生は《Geographical Magazine》の一號を送って下さった。これはもちろん立派な雜誌ではあるけれども、その所録論文の表題さえ讀みが下らぬ中學一年生の私宛に、これを送って下さった意味はいまだにわからない。いいものは子供にでもよいものである、というような考え方が先生にはどこかにあったように感じられるだけである。

父の死後、昭和十年ごろから、倉敷へ移れるころまで、仙臺へ行っていた五年間をのぞいて、私は毎年正月の元日には先生をお訪ねした。壽美子夫人のお手料理の晝食をいただいて、先生と議論をするのである。そのさい先生は私を決して子供あつかいされることなく、全く對等に扱って下さった。私が先生のお考えを批判すると、先生はそれをいきなり否定されたりすることはない。「そうかな、そうかな」と私に再考と推論の慎重を要請されるだけであった。

「滿洲はシナの領土にあらず」という言葉によって、先生は滿洲國建國のイデオログとされ、軍部に利用されたことは事實であるが、一方、先生の心には、文化の進みすぎたヨーロッパに絶望して、コルシカに理想を托したルソーにも似て、日本は文明化しすぎてだめだが、滿洲には王道を實施することが可能である、その理想國を創るためには、日本は犠牲になってもよい、というお考えがあった。だから軍が華北で阿片の生産をはじめ、金がもうかる上に、副作用として中國民族を中毒せしめうるといったとき、先生は激怒して、軍と仲たがいされたのである。

先生は九十七歳の高齢をたもたれた。これがすでに稀有のことであるが、最後にいたるまで青年のごとき純粹な心情をもって、一日といえども學を廢せられなかったことは、さらに一そう稀有のことであり、九十數歳にして新著作を發刊するという例は恐らく世界でも例がないことではないかと思われる。

矢野先生の思い出

佐 伯 富

矢野先生が停年退官せられたのは、昭和七年五月、その時、私は史學科の二回生であった。この年の先生の講義題目は「清朝史」であった。主として「英國との茶貿易」と「銅の長崎採買」を中心に、中國における銀の流出入について論ぜられたものである。當時、私は清朝史をやる氣持は全然なく、むしろ唐宋時代に興味が牽かれていた。それは當時の學界では、唐宋時代に關するすぐれた論文が多數發表され、おのずから唐宋時代というものが、われわれ學生の話題の一つの大きな中心になっていたせいでもあった。こういったところから、矢野先生の講義のノートは一度讀みかえしただけで筐底に長く藏していた。

ところが後年になって、私には清朝史にも興味が湧いてきた。それは鹽の專賣制度を研究しようとすれば、どうしても史料の豊富な清朝から始めるのが、もっとも捷徑であると氣付いたからである。ところで清の專賣制度を研究しようとすれば、祕密結社や銀と銅錢との比價の問題が直接關係してくる。こういうところから矢野先生の著書や論文を讀ませていただき、得る所が大きかった。『近代支那史』や『近代支那の政治及文化』などから示唆をえたことが多い。とくに『長崎市史』（通交貿易編東洋諸國部）からうけた學恩は忘れることができない。本書では銅や銀の中國輸出がその重要な論點となっており、中國における銀錢比價や鹽商の隆替などを研究するに、大いに役立ったからである。この書物は、日本の資料だけでなく、英・獨・蘭・中國など關係諸國の資料を驅使して成った名著である。日本史を研究する者はとかく外國の資料を用いない。中國史をやる者も西洋の資料はにが手である。こういう研究は矢野先生にして始めて可能であった。

のではあるまいか。

この書物を読み、もっとも驚いたことの、もう一つは、早くも昭和十年の頃に、矢野先生は『雍正硃批論旨』中から、長崎に關する重要な資料を殆んど涉獵網羅して、日本の資料と比較研究し、またその不足を補っていることである。この書物が學界で重要視され、利用されだしたのは、昭和二十四年、宮崎、安部兩博士が、京大人文科學研究所でその講讀を始められてから後のことである。矢野先生の炯眼がしのばれるのである。

私は清朝の研究を始めてから、昭和七年度における先生の講義のノートを讀み返し、更めて先生の識見に敬服した。王朝の興亡というものは、經濟界の好況不況と重大な關係があり、それはまた銀等貴金屬の流出入と深い關連がある。矢野先生がこういう意識をもっておられたかどうかは、私には分らない。しかし重要なテーマを問題として講義された所に先生の識見があるように思われる。

矢野先生の最もお得意な研究は外交史であらう。残念ながら私はその講義を拜聽する機會をうることができなかった。現在、日本でも外交史を研究する人は甚だしい。たといあつても、矢野先生の右に出ずる者は見受けられない。多くの外國語の知識を必要とするからであらうか。しかし近代における歴史の眞相をつかもうとすれば、外交史はどうしても缺くことはできない。さいわい矢野先生はすぐれた外交史に關する研究を多く殘されている。これを繼承して新進の研究者が出現することを望みたいのは私一人であらうか。

私は矢野先生が停年直前の昭和六年に京大文學部に入學した。そこで先生に直接指導をうける機會は殆んどなかった。直接先生からお話を伺ったのは前後四回、第一回は東方文化研究所に在職中、先生の口述筆記を依頼された時、第二回は、先生が私の奉職していた山口高商東亞經濟研究科へ、昭和十八年に講義に來られた時、第三回は、私が山口から京都に歸り、御挨拶に伺った時、および昭和三十六年、私が岡山大學に出講した時である。いつも先生は快く迎えて下さった。そして話題はいつも學問である。先生の話はいつまでも盡きない。この時も種々と有益なお話を伺った。昭和二十四

年、先生のお宅を伺った時、私が祕密結社に興味をもっているとお話すると、先生は『十朝聖訓』の中の「姦宄」の條に面白い資料があると教えて下さった。この資料から「不管地」に關する重要な資料を見つけることができ、後の研究に役立った。

私が先生に直接お會いしたのは、この四回であるが、それが今も私の腦裏につよく印象づけられている。ことに倉敷をお訪ねした時には、大變お喜びになり、人なつこいあの童顔をほころばされた。ところが暇乞いをしようすると、先生は非常に淋しそうな顔をされ、大道までもわざわざ見送って來られた。そのお姿が今も忘れられない。本年一月四日、先生の告別式に參列して、また當時のことが思い出されてならなかった。そして九十九歳という殆んど一世紀の間、生きぬかれた先生の御長生の祕密はどこにあったのであろうかと、自らたずね、それは童心のような醇粹な先生のお氣持と學問に對する情熱とが、その大きな支柱の一つではなかったかと答えてみたのであった。

教室での想い出

外 山 軍 治

矢野仁一先生の想い出といえば、私にとってはやはり、學生時代のそれがもつとも鮮明である。先生が京大を定年退官せられたのは昭和七年五月であるから、五年に入學した私は、幸いに、一、二回生の二年間にわたって講義を拜聴することができたわけである。

一回生のときは普通講義の東洋史概説、二回生のときは特殊講義と史料講讀とであつた。

普通講義は清朝史の概説であつた。私は學年最初の時間には出席しなかつた。開講の揭示が出なかつたからである。その翌日友人から、講義の冒頭に、先生から「滿洲は地名か、國名か、民族名か」という質問が發せられて面喰らつた、ということを書いて驚いた。

私の出席した第二回目の講義のときにも、先生は、「チベットは地名か、國名か、民族名か」と問いかけられた。指名された某君が立ち往生していると、「帝國大學の學生がこれを知らんか」と疊みかけられた。某君の顔面は眞赤になる。すると先生は、氣の毒そうな顔付で、「知らなければいいんだ」。これから話す」といつて、ガラリと調子をかえてその解説にはいつていかれた。

しばらくするとまた、「西藏と書いてチベットと讀むのは何故か」と質問せられる。誰もが答えない。すると先生は、「西藏をチベットと讀むことは中學校で習つただろう。そのとき、どうして何故そう讀むのかということの中學校の先生に質問しなかつたんだ」と無理なことをいわれる。こんな調子でどきもをぬかれたが、先生の講義は陽氣で、獨創的で、

耳新らしくおもしろかった。身をもって感得した歴史學とはこんなものかと思った。

先生の講義はノートがとりにくいことで有名である。とくに固有名詞がうまく聴きとれない。スペリングを質問すると、教えて下さるのだが、それがまた判らない。困っていると、先生は、「假名でいい、假名でいい」といわれるが、その假名でうつすことがむづかしいのである。しかし、講義の内容は、『近代支那史』を抜萃して話しておられるのだということが判ったので、ノートの整理には苦勞しないでよかった。『東華錄』をていねいに讀むことが大切だということ

は、このときの講義で聞かされたように記憶する。

二回生の史料講讀は、ときどき忘れて出てこれられないこともあったが、非常に充實したものであった。曾國藩の「金陵湘軍陸師昭忠祠記」を讀んだときなど、私たちがまちがいがいながら、たどたどしく讀んでゆくと、先生は辛抱しきれなくなつたのか、自分でひきとって讀み出された。讀みおわると、「いい文章だなあ！一字たりとも削ることはできない。一字たりとも加うることはできない」と、感にたえたようにいわれた。そのときの紅潮したお顔を今でも想い出すことができる。

ある日教室で、東洋史談話會の委員として、例會のご案内をしたときだったと思うが、先生から出身高等學校を聞かれた。私が大阪ですと答えると先生は、「それなら、ブリストルさんに習っただろう」といわれた。ブリストルさんというのは、大高三年のとき英會話を習ったアメリカ婦人であったが、テキストの暗誦を強要したり、クラスを二つにわけて、マキャベリズムの賛否をディスカッションさせようと企てたりする、けつたいな先生であった。

そのとき私はうつかり、「授業がおもしろくないといってボイコットしましたので、一學期ほどでアメリカへ歸りました」と答えたのがいけなかった。「どうしてそんな事をしたんだ。君は英語が嫌いか」とお叱りを受けてしまった。先生は大高の隈本繁吉校長（東大史學科卒）といっしょにアメリカを旅行したとき、ブリストル夫人の宅で世話になったのだということを、このとき承った。先生は、氣の毒なことをしたなあ、というようなお顔をしておられた。京大へはいっ

てから、こんな事で叱られるとは思わなかったが、先生の情誼のあついことには感心した。

特殊講義は、その頃先生がとりくんでおられた日清戦争から三國干渉にかけての諸問題であった。しかし、毎回それを續けるほどには研究が進まないから、すでに研究のまとまっている滿蒙における露清交渉史と二本立ての講義をせられた。時間の初めに、「今日は新しいほうだ」とか「古いほうだ」とかこことわって講義にはいられたが、いきなり講義せられることもあって、學生から「先生、今日はどっちですか」という質問が出たりなどして、賑やかなことであった。

先生は昭和五年、第一次計畫進行中のソ連に旅行して、ひどく感銘を受けてこられた。それで毎回のようにソ連の話が出て、ソ連おそるべし、と昂奮をおびて力說せられるのが常であった。また、シベリア鐵道の車中でつくったという和歌を披露せられた。最初に紹介されたのがつぎの一首である。

これこそは幾多朔北の英雄どもの馬に飲ミツカひしイルチシの水か

「新しい歌だな」と先生は照れくさそうにつけ加えられた。新しいというのは、字あまりということらしい。

草書でかかれていて讀みにくい『翁文恭公日記』や判じもののような電稿の讀み方もこのときそのほんの一部を紹介して頂いた。また、漢文とロシア文の兩方が讀めるものが少ない。あつても、史眼がないから駄目だ、というようなことも承つて、先生のいわゆる史眼とは何だろう、などと考えさせられたものである。

滿洲國成立前後からの先生は始終熱氣を帯びておられた。教室で、二十一ヶ條要求における日本の外交政策を痛烈に批判せられたこともあつた。清朝の祿を食んだといわれる先生にとっては、滿洲王朝の興廢はことに關心深きものであつたようである。先生が國士としての風貌を示されたのもこの時期であつた。

今から思うと、何から何までがなつかしく、貴い。それにしても、倉敷にお移りになった先生を一度もお伺いしなかつた失禮な學生であつたことをはづかしいと思つてゐる。

矢野先生のおもいで

内 藤 雋 輔

京大名譽教授、中國近代史の權威として高名な矢野仁一老先生は、この一月二日夜九時、數え年九十九歳の長壽を、倉敷市在住のご令息の宅において、靜かに靜かに、長い眠りにつかれました。昨夏以來、どうも少しお加減が悪いのではないだらうかと、時々お伺いした私には感じられました。然しその都度、先生がいつに變らぬお元氣な口調で、滔々と中國の人民革命についての最近のご研究の一端なり、ご感想を述べられ「君はどう考えるか……」と一寸、言葉を改めるように、いつも私に問いかけられる先生に對し、平生この方面の問題について、とかく不勉強な私は、先生のご期待に副いようのようなお答えができないことを申し譯なく思っていました。それ程、先生は老來益々研究にご熱心で、特に孫文の中國革命から毛澤東の人民革命、更に今回の文化大革命に及ぶ中國の最近事に對する歴史家としての先生の洞徹した史眼による批判は止まるところがなく、常に痛烈であり、進展してやまぬ歴史の命運と革命の必然性を中國の歴史の中に探り、そこに新しい民族の命運が、常に切り開かれてきたことを痛感されていたようであります。

從つて先生は早くから毛澤東の人民革命にも、その必然性を認めつつ、中國人民革命によつて、(イ)役人が賄賂をとらなくなつた。(ロ)匪賊がなくなつた。(ハ)犯罪が少なくなつたという社會生活における三大異變の功績を認め、更に、中國人民政府による四つの政策として、(イ)人民の貧乏からの解放、(ロ)貧富の懸隔の是正、(ハ)人民への奉仕の至上命令、(ニ)全人民の共同目標の設定ということが掲げられて、その目的遂行に革命政府が努力を傾けたことを、ロベール・ギラン、ジャック・ペルデン、ストロング女史などの外人記者や、わが國の知名な記者たちの著書や報道などを詳細に検討して、この革

命のかかる偉大な成果に感嘆と賞讃を惜しまれなかったものでありますが、このことはまた、敗戦後の日本における政治の方向と對比し、國家意識、民族愛を見失ったような日本人の精神的混沌と、社會秩序の混亂とに、深い嗟嘆をいたされたことが大きかったことは、私が先生から屢々、承わったところであります。

一方、先生の學問に對する熱情と、研究態度の嚴正さとは、先生の中國近代史に關する二十餘冊という主要な論著の至るところに窺われますが、かくも長年月にわたり、學界にその影響を與えられたことは特記せねばなりません。更に先生のご人格において著るしい特色として忘れることの出来ないことは、學問に對する熱情の外に、眞實を追求し、社會正義を愛することに於いて全く格段の熱意を注がれるとともに、國民的ヴィジョンの追求、祖國愛というようなことには特に深い關心を常に拂われていたことであり、このことは先生のご一生を通じ、ご逝去の直前にまで少しも變るところはなかったものであります。

例えば先生は清國政府の招聘により進士館教習として明治三十八年より七年餘りも清國に在住され、戊戌政變後の清朝末期の教育改革に參與されましたが、時すでに清朝の命運も將に盡きんとしていたので、たまたま辛亥革命が起り、清帝退位をめぐる袁世凱の腹黒い陰謀が廻らされて、朝野混沌たる重大時局に當り、當時中國在留中の日本人の間に「清朝扶くべし……」という論が起り、先生もまたその中の熱心な推進者の一人でありましたが、この清帝退位という劇的、歴史的時期に遭遇された若い先生が、どんなに熱血を沸かされたことかは想像が出来るので、「清朝末史研究」などにおいて恰も眼前に髣髴するように生き生きと描寫されております。

更に先生が中國より歸朝、京大時代、先生は第一次世界大戰の末期に三月革命がソ連に起り、一九一七年に帝政ロシアが滅亡したその後にソ連に旅行され、なまなましい革命後の状況を視察して歸國された時の講演を、私は京大の大教室で聞きましたが、先生はソ連革命の激しさに對する批判は別として、ソ連における青年たちの新しい國家建設に對する熱情に強くうたれたというようなことを話されたことが、私には今でも強い印象として残っております。

次に先生にとって最も問題とされるのが、滿洲國建設や太平洋戦争についての先生の態度であります。中國史を専門とされる先生にとって古代からの中國歷代王朝の變遷が、周邊諸民族との勢力の消長に左右されていることが多いことは周知のことであり、時にこれら周邊諸民族が中國本土に侵入し、強大な國家を建設して中國本部を支配することも度々あった。従って民族的立場からいうと、今日の中國と稱する地域が現在の日本のように古代から大體、一貫して一國家、一民族の支配下にあったという譯ではない。

例えば滿洲民族の清朝が出現して三〇〇年の中國統一國家を作りあげたものが、辛亥革命によって最後の宣統帝は退位を餘儀なくされ、廢帝として幽閉、僅かの年金で淋しい月日を送らねばならなくなったが、やがて滿洲事變の發生によって祖先の地、滿洲に迎えられ滿洲國が作られたのである。その成立事情については種々の説があるとしても、當時は一般に歴史的必然と信ぜられていた。従って滿洲族の出身である清朝の廢帝が故國に迎えられて獨立國家の主となりえたことは、滿洲民族にとっては感激の外はなかったと思われる。矢野先生はこういう中國歴史の展開を率直に認めて「私は滿洲は中國本來の領土ではないと考えた。もとより日本の領土ではないし、中國本來の領土でないことはいうまでもない……」と述べていられるが、こういう先生の歴史觀からするとリットン報告書が「滿洲は常に中國の領土である……」といっていることに納得できず「滿洲國歴史」を著わして、その誤りを指摘されたことも當然であり、先生はこの著に「王道の成る成らぬ、たゞこの一擧という氣持ちで、實に心血をそそいだ」といつていられることも同感である。先生の歌集に

滿漢の滿洲爭奪は世と共に
激しさまさる觀を呈しき

王道の理想むなしく滿洲を

中日のくさびの夢もはかなく

世のさまはすでに古ならず滿洲を

王道國にとあゝ夢なりき

然も辛亥革命によつて退位を餘儀なくされた宣統廢帝を、その祖先發祥の地である滿洲に迎えて中國古來の傳統的、理想國家の目標である「王道政治」を實現しようという滿洲國の建國に賛意を表され、羽田亨、小西重直の兩先生とともに滿洲國の文化と教育の在り方について、矢野先生は特にソ連との國境問題の資料調査と學校の小定員主義とに熱心に努力されたことも不思議ではない。今日、中ソ國境問題としての珍寶島事件を思う時、當時、先生のこの調査の重要さが思われる。

ただ先生が太平洋戰爭中に、かつて辛亥革命のころ、中國生活を共にし、人間的交流の深い松井石根大將の懇請もだし難く、大アジア協會の副會頭に村川堅固先生とともに就任されたことが、戰爭遂行に積極的に協力したこととして、戦後、公職追放を受けられた理由かと考えますが、このことについては後に日中戦死者のために伊豆山に興亞觀音像を安置されたほど人間味豊かな松井大將が、協會内部における軍人の獨走を止めたいとする悲願に出ていたものであることは、先生が「當時滿洲國に、中國にかつて實現しなかつた王道國をとほ私の悲願だつたから、協會での私の存在理由は、外はその侵略主義ならざることを示し、内はそれへの傾向を阻止することにあつた」と燕洛間記にも述べていられる通りであつたことと信じております。

こうして敗戦とともに、先生は公職追放の身となられ、華かであつた京都時代は終り、やがてご令息の勤務地である倉敷に居を移されたのが昭和二十七年の一月であります。

花なくて名なき日吉の人はよし

我も名なくてまこと住みよし

花はなく散りてあせなん色もなき

日吉の民と名なく住まばや

とは先生が倉敷の穩やかな人情と、しつとりと落ちついた町のたたずまいに心のやすらぎを感じられて詠ぜられたもので、この地こそわが桃源郷だとも考えられたらしく、それ以來、先生は靜かに、かつての長い學究生活と、中國研究の體驗とにより、敗戦後の日本の行方と、新興の意氣に燃える中國での激しい國家建設事業に深い關心を注がれたようであり、現代の國際政治、特に國際事情の動向などの研究には資料の點からも極めて不利な地方都市に生活しつつも、年來の研究による集大成を、共產主義の實現を目指す隣接中國の觀察に注がれ、前にも記したように内外記者や、中國研究家たちの報告などを精しく繰り返し讀破されたようであり、そうして先生獨自の史眼に照らされた中共批判が出来たのでありますが、それは同時に日本の前途とヴィジョンへの熱望となつたのであり、更に、インドのクマラッパ博士や、ロベール・ギランの觀察に深い共鳴ともなつたのであります。かつて松村謙三氏の中共訪問、日中交友の確立へと努力されていくことについて

中共の世紀の奇蹟他人はいざ

由來いかにときわめしかきみ

ク博士の見識のぞまし指導者の

自己抑制むべ人民の信頼と

という歌を作っていられることにも、先生の意のあるところを窺うことができます。

こうして倉敷在住以後の先生のご研究は、ひたすらに中共の新國家建設の方向と、その成果との究明に向けられました。このころ私共の懇願によって岡山大學々生のために中國革命史についての三〇時間にわたる講義をして頂きましたが、この時には視力不十分な先生のために時々、奥様が岡山まで同行されたこともありましたが、

ところが先生はその後、肺炎にかかられ一時危篤の状態がつづきましたが、先生不撓の生命力は不思議に回春を迎えられました。然しその看護のお疲れも出たのでせうか、壽美子夫人はその後、病臥され、昭和三十六年三月に惜しくも先

立たれました。奥様は岡山の拙宅にも度々お出かけ下さったので私共の思い出も一入であります。この時の先生のご悲嘆は見る目も傷わしいようでありましたが、先生はこの淋しさをよく克服され、更に元氣を取り戻して燕洛間記を執筆され、その扉に

生ける時なすべきことを誓いてし

妻とありなんあるがごとくに

我こゝに生ける驗しるしと生ける時

なすべきことを誓いし日ありき

亡き妻の魂や護れる思ひわび

斷ちけん筆をいくどつぎけん

という亡き夫人への追憶が記されているのも、夫人への挽歌として、夫人の限りなき獻身への追慕の情が溢れているものと思えば、また涙するばかりであります。

これらのことが機縁となり、幾度びか筆を斷ち、また思い返しては亡き夫人への悲しみを祕めつつ、夫人に語る思いをもこめて筆を進められたのがこの中國人民革命史論という三〇〇頁近い大著となったものと考え次第であります。

この書の刊行はカルピス社長三島海雲氏の協力出版によるものでありますが、これはかつて三島氏が桑原隲藏先生と矢野先生との三人で蒙古旅行をされた時からの深い因縁であり、それ以來、三島氏と矢野先生との溫かい交遊がつづいているのであります。

さてこの中國人民革命史論は昭和四十一年、先生九十五歳の時の出版であることに先づ驚嘆するのでありますが、この書の大部分は凡そ中國共產黨の成立から人民革命の成立までを詳細に述べ、新中國の歴史的展開をふまえて世界史の新潮流との関連の下に論じてあり、その柔軟な思考力、中國の歴史的発展のバイタリティを、ためらうことなく究めつくして

やまない先生の熱意は、再び火の如く燃え、理想の世界の一つの姿を、ここに發見された喜びのような熱氣を帯びたものを感じたものであります。

従つてこの驚異すべき老學者の提言は、學界においてもその比を見ない獨特の地歩を占める勞作であり、中國の現状に關心を有する研究家たちの間においては大きな注目を集め、この老先生が九十餘歳の高齢にして今なお、一般歴史家として最も困難とする現代史の批判という重要問題を中心としたこの大著を公刊されたことに、心からの驚異と讃嘆とを惜しまなかつたのであります。

翌四十二年五月十三日、奇しくもこの日は先生の誕生日でもありましたが、私ども在岡の教え子たちが發起人となり、先生のご高壽と併せてこの大著の刊行記念會を岡山で催しましたところ、先生は始め、この企てにあまり賛成されず、出席を快諾された地元の方々にも當日の朝になつてお斷りをせねばならないことになり、私は少し困りましたが、然し、京都方面へはそのまゝにしておきましたので、京大からは宮崎、桑原、田村の諸先生がわざわざ参加され、岡大を始め、教へ子たち三〇名ばかりが集まつて和やかな會合となりました。この時の先生は大變お歡び下さいました。

ところが先生の旺盛な研究心は止まるところがなく、昨年八月には歐ア協會の懇請により、月刊「共產圈問題」誌の卷頭論文に「理由^{わけ}のわからぬ中共の文化大革命」と題し、三〇頁に及ぶ大論文を執筆されました。この論文において先生は従來、毛澤東による人民革命の成果を「中國の歴史未曾有の革命であり……孫文の遺業はここに達成された」として

國民^{くわんたみ}の幸福^{まち}を思えば

毛こそは孫の遺業を成したれといわん

と感心された毛澤東が文化大革命を惹き起し、人民革命の結實のために、毛が國家主席を辭任した後をうけて國家主席に就任し、人民公社などの諸政策の遂行に協力し、毛澤東の片腕として努力してきた劉少奇一派を、資本主義の道を歩むソ連修正主義者、反革命者として追放しているが、これではこの文化大革命と稱するものは毛澤東の權力闘争の表現にすぎ

ないので、これは全く彼の世紀の大陰謀であると斷じていられ、更にこの文化大革命は「中國が社會主義社會より、共產主義社會に移行する過渡の段階において、必要不可欠の革命でなかった。むしろなくてもがなの革命であつた」とまで論じていられます。

この論文は悲しくも先生の絶筆となつたのですが、これを読むと、齡、百歳に近い老先生の胸中に權力を排し正義を堅持し、眞實を追求して已まない生來の激しい情熱の迸ばしつていることがひしひしと感ぜられ、一讀して先生の老來、少しも衰えることのない氣魄に強くらたれるものであります。

晩年の先生は一切の世俗的なことに何等の執着も關心も示されず、ただ國家とか民族とかの進路はいかにあるべきかという大きな理想追求と、人間の育成、教育者の理想ということに熱情を傾けていられました。先生こそ孤立を恐れず、自分の理想、信念に邁進された偉い人だと考えます。ともすれば怠り勝ちな私が先生を訪ねて、そのご研究を熱情をもって語られるのを聞く毎に、私には更に新しい氣力が湧いてくるのを感じたものでしたが、今やこの老先生を失なつたことは私にとって誠に堪えがたい悲しみであります。

矢野先生と「昭和六年」

藤 枝 晃

矢野仁一先生は昭和七年の六月に停年となられたが、その年度は二か月足らずだけ二回生以上のための特殊講義だけしかなかったもので、昭和六年入學の私たちのクラスが先生の最終の受業生ということになる。

先生が倉敷に隠棲せられてから前後三回お訪ねしたが、さいごにお眼にかかったのは、夫人の一周忌に追悼音樂會が京都で開かれた折である。孫にあたる井内澄子さんがベートーヴェンのソナタを弾いた。音樂會が終って宿舍の京都ホテルまで先生について行った。一階のロビーで暫く話すうちに、先生は手洗に行きたいと言いつ出した。一階に手洗はないので、エレベーターで地階に下りたが、自動式だったので、私がボタンをおした。

「ホー、このエレベーターはセルフ・サービスか」

と先生は感嘆の聲を發した。とたんに私は昭和六年を感じた。その年、京大の學生食堂が改装・値下げされて、「セルフ・サービス方式」というのが、そのうたい文句であつた。この方式の食堂が當時としては極めて目新しいものでもあつたが、そのころ京大では先生も學生もむやみやたらにこの言葉を使いたがつた。たとえば教室でプリントを配るのに、「各自がとりに來い」という様な場合にまで「セルフ・サービスでやれ」という調子である。押しボタン式とか、オートマチックとか言わないで、「セルフ・サービス」がとっさに出てくる所に、昭和六―七年の京大が脈々と先生の中に息吹いていた。

席に戻ると間もなく先生は「澄子の所へちょっと行ってやろう」と言いつ出した。先生の手をひいてもう一度エレベーター

丁の前まで行ったところで、先生はセルフ・サービス式のエレベーターがよほどお氣に召したらしいのだと氣がついた。運轉係のいる方の箱を避けて押しボタン式の方にのり、七階だか八階だかの女史の部屋まで行った。もちろん用事などある筈もなく、女史は夜の會のために着替えなければならぬのに、次から次への來訪者に妨げられて、舞臺衣裳のまま、モデモデしている所であつた。

先生を促して忽々にもとのロビーに戻つた。こんどは先生は「いま誰某はどうしているか、誰某は何をしているか」と、先輩たちの近況を次々に聞いた。近況と言っても、質問が學問内容に關係することがあり、細かな話になると、耳のそばに口を寄せて、相當の大聲を出さないと、うまく通じない。ひと通り終つたところで先生がちょっと容をあらためた。

「それらはみんな學問のための學問だ。そうだら。それがわれわれの時代の學問ともつとも違ふところだ。われわれの時代には、學問はまず御國のためのものでなければならなかつた。そこが違ふ。」

言われてギクリとした。確かにその通りである。だが、御國のための學問と言っても、いろいろ段階があつて、昭和六―七年あたりでは、いちおうその様なゼスチュアをとつていたと言つた型の先生の方がむしろ多かつたのではないかと思うが、先生はその點もつとも純粹であり、とくに若い層からは、先生の學問が御國のためであり過ぎることに對する反發も強かつた。昭和六年に九・一八事變が起こり、翌七年に滿洲建國となるが、それには先生の「滿蒙藏は支那の領土に非ず」との説が有力な支えとなつてゐたことは周知の通りである。

それにしても、先生は晩年ソコヒを患つて眼が不自由になり、耳もずいぶん遠い。それでいて、むかしと今との學問の違いを、私の僅かな言葉の中からズバリと引き出したのは、頭のはたらきだけは頗る健全ということである。それまでに、私の言葉に先生から一々の確な返事がはね返ってくるので、驚いていたのだったが、ここに至つて、何だかゾツとした感じで、もう返答もできなかつた。兩足を昭和六年につけたまま、その弱りきつた眼と耳とで、昭和四〇年をしつかと

抱んでいる。

もっと大きな驚きをうけたのは、昨年の暮れの廿八日か廿九日かに先生の論文の載った『共產黨問題』十三の八を頂いたときである。文化革命への疑問が天衣無縫にズバリズバリと述べられてある。これでは、うかつに禮狀も書けない。ちようど年賀狀を書きかけていたが、あらためて禮狀兼賀狀を差上げようと、ぐずぐずする内に、正月の二日になって先生の計報が來た。先生は元日はまだ頗る元氣だったそうである。先生の存命中に讀後感を申上げることのできなかったのが、返す返すも残念である。

矢野博士の追憶

宮 崎 市 定

私が京都大學史學科に入學したのは大正十一年であり、當時その東洋史には内藤・桑原・矢野三教授が揃っておられ、翌年には羽田助教がフランス留學から歸つてこられたから、正にその黄金時代に當っていたわけで、誠に又とない仕合せな星にめぐりあわせたものである。

その頃の大學は三年制で、史學科では第一學年は各科を通じて普通講義を、第二學年になって初めて専門に分れて其科の特殊講義を聽講し、第三學年になって演習を受ける旁ら卒業論文の作成にかかるのであった。そこで入學勿々、私は當然矢野先生の東洋近世史を聽講したが、これは清朝史の概説であつた。先生の講義はノートが取りにくいというのが先輩

たちの評判であったが、實際に出席してみるとそれ程のことでもなかった。恐らく先生の方でも用心されて六ヶしい文字を全部黑板に書くように努められたからであろう。達筆で大きく書かれたから黑板は忽ちいっぱいになってしまった。

學年末の試験の代りに「支那内亂の性質」という題のレポートを課せられた。先生の講義はこの問題について嘉慶時代の白蓮教の亂から、太平天国に至る概況について述べられたが、この外には當時においては我々の讀むべき日本文の參考書は殆んどない。僅にあるのは稻葉君山著「清朝全史」くらいのものであるが、それも誰かが借り出して、書庫に返っていない。先生御自身の等身に及ぶ著書は、その翌年頃から弘文堂によって、ポツポツ出版されだしたものである。そこで困って請益のために先生の田中飛鳥井町のお宅に參上した。

すると先生は丁度讀みかけておられたと思われる鉛印本の「東華錄」を開いて、ここを讀んで見ろ、と言われた。何時の時代の所か忘れてしまったが、何でもその中に擒殺という字があった。擒という字は初めてお目にかかった字だが、あてずっぽうに擒と讀んだら幸いに當っていた。並という字を副詞に讀んで賞められたが、これは日頃、高井蘭山譯の水滸傳を愛讀していたお蔭であり、高俅が宋江等に招安の詔書を讀んで聞かせる文中に「並びに赦免を與う」とあった文句がふと頭をかすめたのであった。「初めの間は仲々讀めぬものだが、勉強して行くうちに次第に讀めてくるようになる」と仰言つて、今度は「太平天国のことを知りたいなら、先ずこれを讀んで見よ」と、「金陵兵事彙略」という二冊の本を貸して下さった。

さて下宿へ歸つて讀み出したが、大體の意味は分るのだが、ところどころさっぱり讀めない箇所がある。胡以晃の三字が人名であるとは最後まで判らなかつた。水滸傳にも三國志にも人名の中に以という字が入っているものがなく、以は必ず前置詞に讀むものとはばかり考えていたからであつた。併し分量が少いとはいへ一部の書を史料として讀んだのはこれが最初であり、これは色々な意味で私の其後の勉強に役立った。

その一つは具體的な史實によつて、直接に太平天国の印象を得たことである。だから其後、それが農民運動だ、という

ような説が流行しても、どうもおかしいな、と思って受けつけず、辛亥革命の先驅だ、と言われても、そんな價值のある代物ではなかった、と従前の評價を變えなかった。この點では私は先生の正しい後繼者である。それから四十年あまり考へ續けたが本筋においては變ることなく、多少の私見を混えて「史林」に發表したのが、私の「太平天国の性質について」である。

二回生の時の先生の特講義は「支那近世外國關係」という題で、ポルトガルと中國との關係に始まり、阿片問題まで行くと、今度は一轉してチベットをめぐる國際關係に入り、ここでは地名人名を漢譯した難字が多く出てくるのに大いに悩まされた。三回生の演習には清朝と諸外國との條約文の解讀で、尼布楚條約から南京條約に至る主要な條約が取りあげられた。

私の中國史に對する興味は主に宋より以前に向けられ、實のところ近代についてはあまり關心を有しなかった。併し先生に三年間薫育を受けたお蔭で清朝史についての大體の概念を得、近世的な漢文に慣れることが出來たのは其後の私に非常な力となった。先生が昭和七年停年で退官された後、世界情勢がだんだん險惡となり、殊に對中國問題の解決が焦眉の急となった折、我々研究室員は新たに教室主任となられた羽田教授の指導の下に、東亞研究所からの委託調査事業を引きうけることになった。研究の題目は概ね中國近代の内政外交、若しくは邊境問題、民族問題などであったが、教室にはそんなに多くの近代史専門家がいたわけではない。いきおい専門外の烏合の衆を狩り集めることになったが、私もその一人に入れられた。丁度私は教室の若い助教であったから、こういう際には最先に立つて働かねばならぬ立場にあった。そこで安部健夫君などと、題目を分けあつて史料を讀み出したのであった。

これが若し從來全く手をつけなかった時代のことであつたなら、その戸迷いは更に大きなものであつたに違いない。幸いに多少は見當がついていたので、あまり苦勞することなく次第に興味をもって研究に没入することができるようになった。この時ほど矢野先生の學恩をしみじみと感じたことはない。先生が退官後も續々と出版された多數の著書、中でも

「アヘン戦争と香港」「アロー戦争と圓明園」は直接私の研究に役立つものであった。東亞研究所報に私が發表した「英佛聯合軍の北京侵入事件」は先生の研究を拜借して出来上ったものである。ただ年代の経過の間に「籌辦夷務始末」のような根本史料が出版舶載され、それを利用することが出来たのは勿怪の幸いであった。そしてこの際の清朝史研究の面白さがやがて私を「雍正硃批諭旨」の研究に引きこむ結果となった。

歴史のような學問においては、どんな知識が何時、何處へ役に立つか知れぬものだということをつくづくと感ずる。國史や西洋史のことならば専門外だといって知らぬ顔ができて、東洋史の範圍内では、専門外とは言つてすまされぬ場合が生ずる。そういう際にはいち早く準専門家の顔をして研究に携わりうる修養を身につけておくことが必要である。又そうでなくても研究を深めれば自然にその波動が他の時代にも及ぶものであるから、一々他人の意見を聞かないでも、自分の手である程度までの調べがつくだけの素地を造つておくことが必要である。他人の手を借りたのでは、他人には他人の流儀があるから、必ずしも此方の注文通りには行かず、齟齬でなければ妥協の生ずる虞れがある。この點で私は最初あまり興味を有しなかつた分野で、矢野先生の近代史、及び羽田先生の塞外史を受講できたことが非常な仕合せだつたと思っている。

先生のお宅は初め田中飛鳥井町にあり、大學にも近いので度々お邪魔に上つてお話を伺うことができた。玄關を入ると正面に大きな紫檀の掛額が吊つてあり、成親王の楷書が縁に彫りこんであつて、これが一っぺんに學問的な雰圍氣に人を誘い入れる。そこから右手の植込みに面した客間へ通され、端座して腕組みしておられる先生から四方山のお話を伺うのであつた。

先生は一般教育問題について、幾つかの主張をもつておられた。その一つは小・中學校の先生は小人數の生徒を受持つて個人的な指導のできる教育でなければならぬということ、次には學校全體も小人數でせいぜい二、三百人に限り、校長先生が全生徒の顔を覺えるくらいでなければならぬことなどであつたが、現今漸くマスプロ教育の弊害が指摘されるよう

になつて見ると、先生は天下の憂えに先立つて憂えておられたことが判るのである。

先生はまた日本の歴史教育の仕方が悪いことを指摘された。生徒に簡単な教科書を持たせ、先生が詳しい虎の巻をもつており、教室で先生のやることは、生徒の教科書に尾鰭をつけて敷衍して行くことである。これでは先生の教えることは、どうでもいい煩瑣な史實ばかりであり、結局一番つまらないことだけ印象づけるのが落ちになる。これでは全く反対で、生徒に稍々詳細な事實を盛りこんだ教科書をもたせ、先生はその中から、どこが重要であるかを教えなければならぬ、という御意見であつた。先生の「東洋史大綱」はそういう目的のために著わされたのであつたが、どうもこの本は教科書として文部省の検定に通過しなかつたらしい。文部當局の意見は、教科書とは生徒が丸讀すべきもので、それにはこの本は詳しすぎるというのであつた。この書が出たのは昭和十三年で、丁度その頃私はフランス留學から歸つてきたのであつたが、フランスのリセーで生徒に讀ませる世界史の教科書は非常に詳しく、日露戦争の記述においても相互の捕虜の數を比較して、露軍による日本捕虜の數が非常に少いことなどまで書いてある旨を申上げると、先生は我意を得たりと大いに喜ばれた。

先生はまた實際の政治、特に大陸問題に對しては興味以上の情熱をもたれた。これはもちろん先生に限られたことではなく、明治人に共通する一般的な傾向であり、實はその餘澤を受けてこそ日本は不十分ながら、アジア諸國に先んじて近代化することができたのであつた。ところで先生の抱負たる大陸政策はすぐれて純粹な理想論であつた。先生は軍部に知友が多かつたが、軍部が王道といえ、先生は本當に周の文王の王道を實行するものと考えておられた。最初は先生を利用するつもりでいた軍部は、最後には先生の純粹さに閉口してもあまし、次第に疏んじ出したが、先生の方では少しも疑念を抱かれなかつた。人に欺されても人を疑わない、というのが先生のモットーであつた。

滿洲國が成立した直後、先生は彼地に旅行して歸られた。當時笠森傳繁という人が日本人の政治團體を組織して活躍していたが、その片腕となつて働いていたのが、私より一年おくれて卒業した河村久三郎君で、そんな關係から先生は笠森

氏に會つて、大いに肝膽相照するものがあつたらしい。歸國されて後、土產話の會のあつた折、彼等はいつたい何の爲に働いているのかという疑義が出された。先生が「どこからも金など貰つて活動しているのではないことは確かだ」と保證されると、居あわされた内藤先生がすかさず、「ようし、そんならいつたい、彼等は日常生活費をどうしているのか聞こうじゃないか」と鋭く斬りこまれた。事、このような機微に關する實際問題となると、正直のところ到底内藤先生の敵ではなかつた。そこにまた先生の無類のよさがあつた。

飛鳥井町の先生のお宅は、近くの養正校の敷地擴張のため強制收用のような形で市に買い上げられ、先生は松ヶ崎へ家を新築して移轉された。まだ移轉先がすっかり完成しないうちに、市役所の人足がやつてきて屋根瓦をめくり始めたので、ひどいことをすると先生が憤慨しておられた。そのあたりはいま養正校の運動場になっているかと思う。そんなことで急に移轉が始まり、當然のこととしてお荷物には本が多かつたので、一日お手傳いに上つた。戦後になって先生は令息正幸さんと合體するため、この松ヶ崎を引き拂つて倉敷へお移りになった。ご出發の汽車の時刻を伺うと、側から奥さんが「永年すみなれた京都を立つことなので、皆さんに見送りなどして頂くと、餘計に悲しくなりますから、こっそり立ちたいと申しております」と仰言つておことわりになった。奥さんの壽美子夫人は世界の舞臺を踏んでこられた方だけに人生経験が豊かで、私の家内などにも、それとなく色々ためになることを教えて下さることが多かつた。私共がフランス滞在の中におなくなりになったので、お葬いに參上することも出来なかつた。

先生は倉敷へお移りになり、非常な高齢となられた後も、ついぞ學を廢せられなかつた。距離が遠くなるにつれて、稀にしかお訪ねできなかつたが、お目にかかつてお話を伺う時には殆んど昔と變らぬほどお元氣であつた。先生は明治五年のお生れであるから、私とは約三十年も違い、これは完全に一世代の間隔である。それにも拘わらず私は、いまよく言われている世代間の斷絶をあまり感じなかつた。これは私の考えが年寄りじみているためであらうか。私はそれは考えたくない。それは先生の方がいつまでも若々しく、青年のような情熱を持ち續けてこられたからだと解釋したい。

先生が九十五歳を控えて「中國人民革命史論」の大著を出版され、その後二年餘を経て「理由のわからぬ中共の文化革命」なる大論文を雑誌に發表されたことは誠に驚歎に値いする御氣力と申す外ないが、數え年九十九歳でなくなりになった後、更に遺文二篇が世に現われたことは、いよいよ私共を驚かした。その一は岩波の「世界歴史」第九卷附録の月報に載せられた「東アジア歴史旅行」であり、この内容は概ねどこかで一度拜見したものと重復するが、他は古代學協會の「濱田耕作先生追憶古代文化論攷」に寄せられた「濱田耕作君の偉大なる業績」と題する一篇で、簡單なものながら特に新たに起草されたものであり、その中において近時日本の學生の輕薄な動向と共に、中國における古典輕視の風潮を慨歎し、最後に毛澤東の政策如何に拘わらず、斯學遂に廢すべからずとして、確信を以て古典の復興を斷言しておられる。先生よりもずっと若い我々が反つて先生に鼓舞せられて落付きを取戻したような恰好である。先生の若々しい、學問に對する炎のような情熱は生命のあらん限り燃え續けたのであった。

ただ惜しまれるのは、國家は遂にこの愛國の老碩學の一世紀に垂んとする優れた學問活動に對して何等の優遇措置を講じなかったことである。先生の中國近代史、特に外交史の研究は他の追隨を許さぬものがあり、先生の古典的な名著は出版後四十年を経た現在でも、これに代る新研究は日本にも外國にもまだ現われていない。國家の榮典制度はいったい何のためにあるかを訝る者は私一人ではあるまいと信ずる。

煩惱兒の臉に映った父の人間像

矢 野 正 和

晩年の父は、並みはずれて大きい頭に、枯れたまだらな髪をそよがせ、淡い黄白の色つやをした顔には、黒い太い眉毛があり、遠くなった大きな耳にかけられた眼鏡の奥に、鋭くて優しそうな瞳を覗かせ、どっしりと落着いた鼻の下に、豊かな髭をたくわえ、年の割には肉づきのよい、ゆったりとした面構えの、肩の張った軀つきでした。そんな父が、風采かまわず、餘暇を畑いじりに、黙々と、勤しんでいた姿には、どこか芯の強い、素朴な野人を想わせる風情がありました。

壯年の父は、一學徒として、將來の日本における文化國家、福祉社會建設のイメージを描いて、人類の「限りなき進歩の過程にあつて、現在はいかなる段階にあるのかを、過去の光に照らして明らかにせんとする」歴史の學を志し、就中、未開拓な中國の、且つ、最もヴァイタルな現代の、政治・外交の分野の研鑽に、この上もなき生き甲斐を感じ、爾來、求真一途の生涯を貫いたのでした。

父が、京大文學部の「意氣軒昂、新旗幟を樹立せんとした」『東洋史學派』の一員として、教職にあつた頃は、「和衷協同した平和な雰圍氣のうちに、師弟間で實のある談論の風發した」『よき時代』であつたようです。しかし、その時分の父の講義は、生まれながらの東北訛りの訥辯で、昂った調子の割合には、聴き取り難かつたことと察せられます。その著書については、凡夫の私には、難文の故に、近づき難さを感じて、これまで玩味する機会を逸してきましたが、この度、必要に迫られ、その『中國人民革命史論』を読み返してみても、その論述に多くの疑點を見出し、眞意を問ひ質してみたく思つたことなのですが、答えなき今日となつては、唯々、推察するの外はありません。曾て、父自身、ロマノフの

『滿洲におけるロシア』のなかの文章の意味を解しかねて、教えを乞うたレニングラード大學のロシア語教授ボズドネーフが『難しい言い回しをする悪い癖だ』と斷じた彼に勝るとも劣らない、その文體の難澁さが、父の論文を讀破することを放棄させているのだと思われまゝ。彼是因をなして、父の言論の本旨を理解された後繼者が數少ないのが、少なからず心残りではなかったかと推量されます。

戦後十年、思い出多き京洛の地を後にして、拔群のユーモリストである弟の倉敷の家に、又となき安住の地を得て以來、『ぼんやりしていると、苦痛になる』と云う父は、ひねもす書齋に閉じ籠もつて、讀書三昧の生活でした。そして、『朝な夕なに、古を懷い、今を慨して、その感興を託した』と自負する短歌を、身内のものに披露するのをこよなく欣びとしていたようです。しかし、その發想の單純さは、聞く者の感情をさして沸き立たせないようでした。

このように、學究の道では、孤獨な環境であつた父は、來訪の知友・後輩との談笑を、殊の外、喜びとし、相手方の困惑をも意に介さず、得々と、長廣舌するのでした。それを最後まで溫かく聞き入れて下された方々の寛容を、心のうちでは、嘸かし、感謝していたことと思います。そして、彼岸でも、相も變らず、反人民革命の『晚鐘』『未完の歌集』を打ち鳴らし續けていることでしょう。残された床の間には、父の生前に、社會主義社會が中國で成長し得るか否かについて論じ争つた當の相方の故鈴木虎雄先生から親しく贈られた……史觀異我輩 靈椿翼久長』という墨痕も鮮かな五字絶句の掛軸が、結着を見ぬまま、今もなお、壁間に、淋しく懸かつております。

『すべからく、お人好したれ』と人に説いた父は、ひとからは『日和見主義者』と評されながらも、超然として、自らが理想とする、王道樂土の出現を、ひたむきに願望しておりました。そうして、人民革命が成し遂げられた中國には、完全な文化社會が直ぐにも到來したものと信じこみ、『文化大革命』は、なくもがなの革命ではないか』との疑問を持つておりました。死に至る瞬間まで、永遠に平和なる世界が生起することをひたすら希つた父こそ、稀なるドリーマーであつたのかも知れません。

現今の學校紛争に對しては、義憤の念と、慷慨の情、もだし難く、道德教育の不在と確固たる指導理念の缺如とを嘆き、「師弟愛の濃やかな情感の觸合い」を惹き、熱を込めて、教師のこころと愛育の道とを説くのでした。そのような姿勢に、ナイーヴな心情の持ち主で、主意的正義派、儒學の末弟であつた父が感じられるのです。「青年に夢國民に希望を與える眞の政治家などや出でぬぞ」と詠んだ父は、老いて益々、現代への警句、慨世の氣魄を固持した愛國の熱血漢、孫文の學徒でありました。

「山を裂き谷を埋めてこの道を開きし人のこころおもひて」、求道一筋に、倦むことなく、マクロの歴史の世界に純血を滾らせ續けた父も、泡を飛ばしたその同じ口唇に微笑すら浮べて、鬭争に明け暮れるこの俗世に、あたかも『斷弦』『未完の歌集』したかのように、忽然と、別れを告げたのでした。今は、『蝶々』の輪舞する花園で、「待ちわびし君は來りて 我は君と 歌ふリーザの聲もうれしく」、とこしえの旅路を楽しんでいることでしょう。

「天よ我がいのち奪うな我が學を世のためになすことあるを思いて」、「我ならでなすべき人は他にあらじと思う心に我は生きつつ」、壽命のある限り、精魂込めた文筆を絶たなかつた父は、近親の者には、『泰山』より輕くはなかつたように思えるのです。とりわけ、煩惱兒にとっては、敬慕する學徳の師父であり、また、まことに仁愛深い、こよなく子煩悩な父でありました。青汁にそのエネルギーを湧き出させ、他人をして、『曠原』（主にシベリアを詠んだ歌集）のフェニックスであるがごとくに想わせた父、並々には成し得られぬ白壽の祝いを正に迎へんとしていた父、その父も、今や亡し……只、安らかに眠り給へと祈るのみです。

* かつて、ニューヨークの舞臺で、『蝶々夫人』に扮したという母と、花園の蝶々とをかけたつもりです。

* 父が、レニングラードで觀た歌劇『ピコワヤ・ダマ』（『スベードの女王』の女主人公、リーザ）の氣持を汲んで詠んだのを、母、『壽美子』になぞらえてみました。

矢野仁一博士の印象

吉川幸次郎

私は矢野博士の教室にいたことはない。教室外の接觸は、いくつもあった。接觸のたびに、ひたむきな清潔な人格を感じた。「剛毅木訥は仁に近し」。「論語」の「子路」篇の言葉を、私いつもは思いうかべた。

さいしょの接觸は、大正の末、文學部の學生であつたころ、支那學會毎月の例會で話して頂くために、田中大堰町のお宅に伺つた。なかなか引きうけられず、小島さんにでも頼んだらといわれる。祐馬氏である。その小島さんが、一ど先生に話してもらえといわれたのですと、つっぱった。夜の教室で行われたその講演は、土庶の階層の循環的交代、つまり支配層と被支配者のそれについてであり、小島氏の説に言及された。講演が終わると、小島氏が發言を求め、博士は演壇からおりて、小島氏の肩をだきかかえるようにしながら、この二人の間に同じ見解が発生したことは甚だ嬉しいといい、小島氏は苦笑した。兩氏が、それぞれの最晩年に、巨大な中國革命史論を執筆し、いずれも完成しなかったの、前史である。

昭和のはじめ、中國留學のピリオドとして江蘇を旅した私は、揚州から運河を北上して、寶應縣に、「論語正義」の著者劉寶楠の後人をたずね、前清の内閣中書であつた劉翰臣氏にあつた。進士館にいたことがあると語つたので、矢野という西洋史の先生は記憶にないかと聞いた。お名前は忘れたが、たぶんその先生だろう、大へん明晰な講義で、通譯はなんとかいう男、甚麼東西、と劉氏はいったが、「燕洛間記」によれば、それは曹汝霖氏のはずである。通譯が手間どると、その日本人の先生が二こと三こと中國語でいわれる、その方がよくわかつた。そういうむねのことをきいたと、日本へ歸

ってから報告すると、ただ笑っていられた。

私が留學から歸った年の夏、桑原隲藏博士がなくなられ、百萬遍で追悼の會合があった。司會者の狩野直喜博士が、次は矢野さんと指名した。もし桑原先生が京都大學へお呼び下さらなかつたら、私は支那浪人になっていただろう、清朝の滅亡のときには、私もいささか盡くすところあらんとしたが、大廈の倒るるは、一木の支うる所に非ず。そう博士がいうと、狩野氏がぐすりと笑った。

狩野氏は、「剛毅木訥」の人の表現の大げさを笑ったのであるが、博士が清朝滅亡時の「環境」と「雰圍氣」の中に、したしく身を置いた人であることは、「清朝末史研究」の序言にいうごとくである。若い學者何人かと倉敷へゆき、當時の「雰圍氣」を博士からきくことを、私は桑原武夫君と企畫しながら、私どもが無精をしているあいだに、長壽の博士も、數え年九十九で逝かれた。

博士は大學を定年退職後、しばらくは清末外交史の研究のために、東方文化學院京都研究所の研究員として、形式的には私と同僚であり、ときどき研究所のホールで話した。中國の過去の文明は、はなはだすぐれるが、すぐれるゆえに少數者のみのものであらざるを得なかつた、君はどう思うかと聞かれ、同感のむねを答えると、そうした文明の中で、ことに重點は、禮だ、狩野さんはそれをやっていられる、故に私は狩野さんを尊敬するといわれた。

清史の専門家である蕭一山氏が、世界一周旅行の歸途、日本にたちより、研究所に博士をおとずれたときは、私が通譯した。滿洲事變後であり、滿洲は中國の領土でないという博士の説を蕭氏はなじり、博士は自説の根據をのべた。蕭氏が更に、お説はもっともな點もあるとしても、お國がいま滿洲で相手にしている連中、あれは何ですかというのを、私はそのままに通譯し、博士は當惑された。

太平洋戦争の末期、博士は文部省の協同研究費によって研究班を組織され、私も協力を求められた。中國専門家でない人の参加をも求めてはと進言したりしているうちに、終戦となり、研究は繼續しなかった。

さいごに謁したのは、昭和三十九年、桑原武夫君、貝塚茂樹君とともに、倉敷においてであった。中國における禮の意義について論じたいから、そのうちに又あおうと、九十翁の關心と元氣とは、かつての研究所のホールにおけるのとおなじであった。

葬儀には間にあわず、のち數日、倉敷へ弔問に行つて、歸り、久しぶりに「支那近世史」を開いた。そうして序文の言葉に感動した。

——私は支那には史傳家、注釋家、纂輯家、考證家、校勘家等はあるが、史家はない。西洋にも所謂支那學者、特殊事實研究家、譯注家、教科書的編纂家等はあるが、支那に關する限りに於ては、矢張り史家はない。

ひとり日本のみは史家を出す可能性をもつ、本書の著者がそうであり得ているかどうかは讀者の批評に任すといひ、更にいう、本書に敘述する事實は、「一として無意味な事實なきを期した」云云。

何十年か前に一ど讀んだはずのその書を、またいささか讀むと、あまりにも多くの事實が叙せられており、事實の背後にある意味を、私のような素人がさぐるには、腰をすえての熟讀が必要なように感ぜられる。意味が明説されているものがないではない。たとえば「同治中興」を論じて、

——支那に於ては朝廷は徳さへ衰へなければ力などはなくともよいのである。却つてない方がよいことさへもあるのである。第二十一章、同治、光緒時代の平和と清の衰運、四九六頁。

博士の書が、博士と分野を同じくする學者によつて、現在どれほど讀まれているかを、私は知らない。熟讀の人を、その書は待っているように思われる。庚戌四月二日。